

二〇二五年度 学力検査

「現代の国語、言語文化（古文・漢文を除く）」

解答番号

1

5

26

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお設問の都合で本文の段落に 1 ～ 18 の番号を付してある。

1 かつて世界の中に住んでいた魔物や神秘はイツソウ(a)されたのち、世界には新たな幻想や謎が生じている。

2 (注1)ラスコー人にとっては、怒涛(どとう)の如き動物の群れの動きが驚くべきことであつたし、(注2)ホメロスにとっては、戦場での運命の変転こそが驚くべきことであつた。

3 ところが中世の職人にとっては、この世を超えた神意を暗示する神秘以外には、すでにこの世に驚くべきことはなくなっている。この世では、それ自体で明々白々に神的なもの・偉大なものなどはや消滅していた。しかし、17世紀のオランダ絵画においてこそ、現世の脱神話化・脱魔術化は頂点に達する。プロテスタントの信仰は、現世における「神秘」をことごとく偶像崇拜として禁欲的に排除したからである。

4 オランダ絵画は、日常のあらゆる細部が全世界につながり、それを映現(注3)するミクロコスモスであることを実感させる限り、世界市場の成立とプロテスタントの信仰にかなつたものであつた。世界のどこにもどの瞬間にも、神秘も魔物も、特権的に意味深いものは存在しないのだが、どの部分でも直接世界市場につながり、世界の全体を反映しているゆえに、どの部分にも世界の調和的全体が含意され、絵画の題材となり得た。(1)このような世界観の哲学的表現と言えるのが、スピノザとライプニッツの形而上学(がく)である。スピノザにおいては、我々のいかなる認識も、全体としての神の思惟(しゐい)という「神の属性」の一部としてのみ意味を持つとされ、ライプニッツにおいては、いかなるタマシイも「宇宙の生きた鏡」として、宇宙の全体をそれぞれの観点から映現していたからである。そのいずれにおいても、実在的な悪や非合理性は存在せず、個と全体は「予定調和」の関係にあるとされた。

5 しかしその後、世界市場による個と全体の予定調和が信じられなくなると、日常世界の克明で細密な描写は、取るに足らぬ瑣末(まづ)事しか表現しないと見えてくる。商品生産が高度に技術化されればされるほど、そのような事物から織りなされる世界は、それぞれ分裂した意味(商品としての意味・大量生産技術の結果としての目的合理的意味)のみをひたすら帯びることになり、ハ(c)

りぼてのような風景が広がるばかり。それは、ドン・キホーテにとって目の前に広がる日常的世界がそう見えたのと同様に、退屈きまりない風景であった。このようなとき、絵画の伝統が達成してきたような表現を再び達成するためには、画家たちはもはや伝統的な手法に頼ることができない。

6 芸術が「ありのまま」から迂回^{うかい}する必要があると感じた例としては、フランス印象派のことを考えてみたらいい。19世紀のいわゆるアカデミーの絵画が **A** 技法に流れ、我々の感性の呪縛と化したとき、その伝統に反逆した独立派の画家たちが、後に「印象派」と呼ばれる冒険に乗り出した。彼らを無意識に捉えていたのは、このような感性の呪縛からの解放である。

7 アカデミー絵画は、ひたすら描写技術を精密化した。ピロードとか毛皮の質感を画布に忠実に反映する技術などが、それぞれ追求されたのを、我々は当時の代表的絵画の上に見ることができる。それではアカデミーの絵画に対する印象派の画家たちの挑戦は、どのような意味をもつのであろうか？

8 彼らの技法上の特徴から言えば、それは筆⁽²⁾のタッチを残す手法であったと言える。ラファエロやダ・ヴィンチの絵画に特徴的であった色のグラデーションを丹念につけるのではなく、タッチを残す筆跡は、いわば一筆ごとに色合いが非連続に変わる。そのかわり一筆一筆は、それぞれが同じ色の絵の具で非連続的に色づけられる。これは、さながらいくつかの色紙をはりつけて絵を作る切り紙細工のようなものになる。

9 これはグラデーションが含むはずの色の多様さを排除し、はるかに少ない色で画面を大きく区切っていくことになるから、いわば画家が手持ちの手段に自ら制限を加えながら絵を描くに等しい。ちょうど、**X** のようなものである。

10 どうして画家は、自ら使える技法や手段にわざわざ制限を加えるようなことをしようとするのであろうか？ それを理解するためには、彼らの時代、風景が産業革命を経て一変したことを勘定に入れる必要がある。そこには、技術的に生み出された製品ばかりで埋め尽くされた風景が広がっていた。

11 ⁽³⁾ 新品の製品で埋め尽くされたシステム・キッチンのような風景が、伝統的な、たとえばオランダ絵画のような絵になり得ない

ことは想像に難くない。20世紀後半の絵画史に登場したアメリカのスーパー・リアリズムと言われる絵画には、実際このような新品のシステム・キッチンのような題材が描かれたり、街角のショーウィンドウなどが、写真にまがうばかりの克明さで描かれたりもしている（実際には現実の写真ではショウテンが一点に集中するので、画面のどの部分も同じ克明さで現れるわけではない。スーパー・リアリズムの絵画が「不自然なまでにリアル」と感じられるのはそのためである）。そのような場合、フェルメールの《牛乳を注ぐ女》とか《デルフトの風景》のような絵とは、**B** になっている。フェルメールが描いた風景にあったような生活感がきれいに拭いとられ、いかにも寒々しい死の世界のような風情をたたえているのである。

12 工業製品は、それぞれ技術合理的な意味を我々に押し付けてくるが、製品相互には何の連関もない。我々の生活はそれらの技術的意味によって分断され、全体の統一を欠くようになっていく。漬物石であれば、漬物石でなくなってしまうから、たとえば庭石に使えるかもしれない。石は、それが置かれた文脈によって、さまざまな多様な意味を帯び得る。したがって、それを配置した風景は、他の石や木とさまざまな可能的文脈を作ることができる。たとえば、何らかの山とか河に模することができるかもしれない。これは、それらが織りなす状況には、何らかの山水風景とか生活環境を見出し得るといふことである。

13 ところが、たとえば冷蔵庫とかテレビなどは、冷蔵庫やテレビであることをやめたら、もはや何の使い道もないただのゴミになってしまうだろう。それらを庭石の一部に使うことなど思いもよらないことである。それらの製品は、すでにあまりにも強烈に製品としての意味を発散しているため、それ以外の文脈を見出すことができないからである。こうしたことは、さびれたデトロイトの工場の廃墟はいきよとか、打ち捨てられたカリフォルニアの金鉱の町の方が、貧しい古風な農村風景よりはるかに荒すさんで見えることにも現れている。新しいものは、古いものよりもはるかに老いやすいのである。

14 印象派が登場したころ、彼らの前に広がる風景はすでに工業生産の製品で満ちていて、それを忠実に写生したとしても、もはや絵にならないという彼らの直感的判断には十分な根拠があった。なぜなら、絵画は生活の直観的縮約を達成すべきものと、彼らも考えていたからである。その時代、冷蔵庫やシステム・キッチンはまだ存在しないが、蒸気機関や鉄道関係建造物を好んで

描いた彼らの前には、フェルメールやロイスダールの当時の風景からは、すでに産業革命を経て一変した風景が広がっていたのである。

15 絵の題材としての風景を失った画家たちは、みずから描写の技術を制限することによって、偶然の要素を絵に導入した。もしアカデミー絵画のような技法で、技術製品のような対象を描写するならば、彼らの絵はほとんど細部まで写真のように決定されたものになってしまい、偶然の要素が消えてしまうだろう。それは、彼らが解決すべき課題がもはや存在しないことを意味する。とりわけ、製品の技術的意味の乱立によって分断され、ばらばらに切りさいなまれた生活に、世界とその経験の実在性と全体性を取り戻すという課題がなくなってしまうのである。

16 そこで、印象派の画家たちは、みずからの画家としての本能に導かれながら、対象からさしあたり製品としての意味を剝奪し、それをただの色彩の断片に還元することから始めたわけである。冷蔵庫はただの白い広がりでしかなくなり、色の断片なら、そこからどのように実在性を浮かび上がらすかという課題が、あらためて画家たちに与えられるだろう。そのとき初めて、「冷蔵庫」という記号によって覆われていた実在世界が、生きいきと立ち現れるだろう。

17 彼らを悩ませていたのは、シラーが謳ったように「現代の生活様式が強烈な力で引き裂いたものを、芸術の歓喜の魔法によって再び結び付ける」ことであり、ヘルダーリンが『ヒューペリオン』の末尾でドイツについて記したように、「職人ならいるが人間がいらない。哲人はいるが人間がいらない。僧侶はいるが人間はいない。主従や分別盛りはいるが人間はいない——手や腕や身体バラバラに散らばって流血砂にまみれた戦場の様ではないか？」といった支離滅裂な分裂状態の克服こそが、近代の芸術家の課題となっていたのである。

18 技術が押し付け、製品が固定化する（機能としての）意味をいったん白紙に戻し、ただの色の断片から対象を構成し直すという風に印象派の技法を記述するならば、「自然を円筒、球、円錐^{えんすい}によって扱う」というセザンヌの言葉と本質的に違わないことがある。なぜなら、自然を円筒、球、円錐に還元することも、そこから製品としての意味を奪うことを意味していたからである。

(田島正樹『文学部という冒険——文脈の自由を求めて——』より。出題の都合上、一部中略・変更した箇所がある)

(注1) ラスコール人——旧石器時代にフランスの南西部を中心に生活していた人々。洞窟に壁画を残したことで有名。

(注2) ホメロス——古代ギリシアの詩人。トロイア戦争を題材とした叙事詩『オデュッセイア』『イリアス』の作者とされる。

(注3) 映現——ここでは、映し出す、という意味。

(注4) ミクロコスモス——宇宙の一部でありながら、それだけで宇宙と同様の全体像を備えたもの。小宇宙。

問1

傍線部(a)～(d)と同じ漢字を含む語を、次の中からそれぞれ選びなさい。

解答番号は、(a) 1、(b) 2、(c) 3、(d) 4。

(配点8点)

(a) イッソウ

1

- ① 部屋をソウジする。
- ② 船をソウジユウする。
- ③ 熊にソウゲウする。
- ④ 難事件をソウサする。
- ⑤ ソウドウが収まる。

(b) タマシイ

2

- ① 違法な薬物をコンゼツする。
- ② 昨日の失敗はツウコンの極みだ。
- ③ セイコン込めて料理を作る。
- ④ 卒業してもコンイな関係が続く。
- ⑤ コンワクした表情を見せる。

(c) ハリぼて

3

- ① カイセイの空を眺める。
- ② 胃のシユヨウを切除する。
- ③ メールに資料をテンプする。
- ④ 細菌の危険性をコチヨウする。
- ⑤ ボウダイな時間を趣味に費やす。

(d)

シヨウ
ウテン

4

- ⑤ ショウリョに駆られる。
- ④ 友人をアイシヨウで呼ぶ。
- ③ 柔道の段位がシヨウウカクする。
- ② ここは交通のヨウシヨウだ。
- ① 民事ソシヨウを起こす。

問2

空欄

A

・

B

に入る最も適当なものを、次の中からそれぞれ選びなさい。

解答番号は、A 5、B 6。

(配点6点)

A

5

- ⑤ 制約的
- ④ 経験的
- ③ 開放的
- ② 意図的
- ① 因習的

B

6

- ⑤ 似て非なるもの
- ④ 似たり寄ったりのもの
- ③ 似たもの同士
- ② 似ても似つかないもの
- ① 似れば似るもの

問3

空欄

X

に入る最も適当なものを、次の中から選びなさい。

解答番号は、

7。

(配点4点)

- ① 周囲に合わせて体色を変える動物
- ② さまざまな色を混ぜ込んだパレット
- ③ まぶしい光を浴びて乱反射する水面
- ④ 色彩も考えず気ままに植えた庭の花
- ⑤ 画素数の少ないモザイク状の写真

問4

傍線部(1)「このような世界観」とあるが、それはどのような世界観か。その説明として最も適当なものを、次の中から選びなさい。

解答番号は、

8。

(配点5点)

- ① 日常の些細な物事に世界市場の影響が現れたことで、世界から神秘が消滅したと考える世界観。
- ② 日常のすべてに映し出される世界の調和が、神秘が起こる証左となりうると考える世界観。
- ③ 神秘が排除され、日常の場面に見て取れる調和に特権的な価値を見出そうと考える世界観。
- ④ 神秘は存在しないが、日常のあらゆるものの中に世界の全体性が見て取れると考える世界観。
- ⑤ 神秘のない世界では、絵画に描かれたものの中に世界の調和的全体が表出すると考える世界観。

問5 傍線部(2)「筆のタッチを残す手法」とあるが、それはどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の中から

選びなさい。

解答番号は、9。

(配点5点)

- ① 日常生活を克明で細密に描写する中世のオランダ絵画の手法を継承しつつ、新たに構築されたもの。
- ② 一筆一筆のタッチが描く微妙な色合いの変化によって、さまざまな物の質感までも再現するもの。
- ③ 漸次色合いが変化していくグラデーションとは異なり、一筆ごとに色合いが非連続に変化するもの。
- ④ 画面の細部まで写真にまがうばかりの克明さで再現され、不自然なまでにリアルに描かれたもの。
- ⑤ さまざまな絵の具を用いて色の多様さを重視しながらも、画家が自らに制限を加えながら描くもの。

問6 傍線部(3)「新品の製品で埋め尽くされたシステム・キッチンのような風景が、伝統的な、たとえばオランダ絵画のような

絵になり得ない」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の中から選びなさい。

解答番号は、10。

(配点6点)

- ① 工業製品は近代社会の象徴であるため、伝統的な画題の中に並べて置いても、素朴な味わいが出ないから。
- ② 工業製品は単独で合理的な意味を有しているため、周囲との相互連関の中に文脈を見出すことができないから。
- ③ 工業製品は技術的に複雑な構造をしているため、意味のある文脈に配置しても、周りとの調和がとれないから。
- ④ 工業製品は自己完結的な意味をもっているため、荒れた寒々しい文脈しか似合わず、温かな風情に欠けるから。
- ⑤ 工業製品は人工物の最たるものであるため、いくら克明に描いても、不自然なリアルさを免れ得ないから。

問7

傍線部(4)「他の石や木とさまざまな可能的文脈を作ることができる」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の中から選びなさい。

解答番号は、11。

(配点6点)

- ① 技術的な合理性のない石は、置かれる場面によってさまざまな役割をもち、あらゆるものに変貌する可能性をもっているから。
- ② 自然物である石は、色や形状などがさまざまであり、配置する場所や場合によって調和するものを選択することができるから。
- ③ 工業製品でない石は、世界との予定調和を乱すことがないため、どんな文脈の中に置いても統一性を崩すことがないから。
- ④ 人工物でない石は、技術的な意味によって周囲を分断しないため、スーパー・リアリズムにおいても自然さを保てるから。
- ⑤ 漬物石と庭石の間には、求められる形状や性質に大した差がなく、文脈に関わらず、常に一定のありかたをしているから。

問8

傍線部(5)「『冷蔵庫』という記号によって覆われていた实在世界が、生きいきと立ち現れるだろう」とあるが、それはどういふことか。その説明として最も適当なものを、次の中から選びなさい。

解答番号は、

12。

(配点6点)

- ① 色を補うものとして壊れた冷蔵庫を画面に取り入れて製品の意味を覆い隠すことで、全体的な整合性をとることができるということ。
- ② 技術的な意味を取り扱うために工業製品を色の広がりと考え、画面全体として個と世界との予定調和を表現するということ。
- ③ 工業製品が色の断片として捉えられることで技術合理的な意味を失い、絵画の映し出す世界が全体性をもった文脈として再現するということ。
- ④ 感性の呪縛となった工業製品をただの色彩の断片として一から捉え直すことで、あらゆる可能的な文脈を表現しうるということ。
- ⑤ 工業製品を単純な形態として再定義し新たな意味を付与することで、实在の生活体験をリアルに描写することができるということ。

問9

本文の内容を読み終えた高校生が、本文の展開や内容について話し合っている。本文に即した内容として最も適当なものを、次の中から選びなさい。

解答番号は、13。

(配点7点)

① Aさん 7 段落では、アカデミーの絵画が描写技術を精密化したことについて説明しています。つまりアカデミーの絵画が、6 段落で述べた感性の呪縛の解放につながったのですね。

② Bさん 8 段落では、印象派の画家たちの技法上の特徴について説明しています。そして以降の段落では、その特徴的な技法がこれまでになかった多彩な色の表現を可能にしたと結論づけています。

③ Cさん 10 13 段落では、中世以降、この世には驚くべき神秘といえるものはなかったが、産業革命で生まれた工業製品は新たな神秘といえると述べています。産業革命が一つの転換点になったのですね。

④ Dさん 14 段落以降で、近代の芸術家にとっての課題は、産業革命後に統一性を失い空疎になった風景に実在性や全体性を取り戻すことだったと述べています。そのことは印象派の絵画からも読み取れます。

⑤ Eさん 18 段落で、印象派の技法について、「自然を円筒、球、円錐によって扱う」というセザンヌの言葉を用いて説明していますが、この技法が功を奏したとも言いがたいと述べています。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「公共哲学」という科目がいくつかの大学に設置されてから二十年ほどが経とうとしている。二〇二二年度には高校のカリキュラムにも「公共」が必修科目として設けられるようになった。この科目は、シティズンシップ教育、つまり「公民としての資質・能力を育成すること」を目標としている。この科目の学習内容は、法、政治、経済、（持続可能性のある）社会について基本的な **A** を向上させることにあるが、それに先立ち、異なった人びとが同じ社会——「公共的な空間」とも表現される——に共に生きるとはどういうことかに再認識を促すパート（「公共の扉」）が位置づけられている。

私たちは、生き方を互いに異にしながらも、どうしたら一つの社会に共に生きていくことができるのか。 **I** これは、まさに「公共哲学」の根幹をなす問いでもある。公共哲学がどのような特徴をもつ学問であるかを、「閉じていない」という言葉を用いて考えてみたい。

第一に、公共哲学が考察しようとする対象（問題領域）が「閉じていない」。この学問が扱うのは、私的には——個人や特定の集団の力では——コントロールしがたい事柄である。そのなかには気候変動や新興感染症あるいはグローバル化した金融市場のように国家の力でも対処しがたい問題が含まれている。

このように、公共哲学が扱うのは、人びとが協働することなしにはそもそも対処することができない問題であり、その協働をどのように編成すべきか、そして、その編成が人びとにとって受け入れることのできるものかどうか、が探究される。

第二に、公共哲学の担い手も「閉じていない」。課題を解決に導こうとする探究それ自体も広く協働して行われる必要があるからである。もちろん専門家（理論家）が果たすべき役割がないわけではないが、その貢献は限られている。解決を要する問題についての理解や認識、そして解決に向けて示されるアイデアは一樣ではない。そうした多様な認識やアイデア、言いかえれば「認知的多様性」の利点を活かしていくことが、公共哲学の探究には求められる。

その意味で、公共哲学は、そもそも私たち市民にとって外在的な学問ではありえない。

II

その探究は、人びとが歴史のな

かでこれまで重ねてきた経験や実践⁽¹⁾ 慣行から出発する。そのなかには私たちが妥当なものとして受け入れるにいたった、共有された判断や確信が含まれている。そうした判断や確信は繰り返し返される闘いを通じて獲得され、定着してきたものであり、たとえば奴隷制も数世紀前までは不正であるとは思われていなかった。人種差別や女性差別が不正であるという判断が定着したのも、さほど昔の話ではない。

第三に、公共哲学という探究のプロセスも「閉じていない」。共通の判断や確信がこれまでラディカルに問い返されてきたという事実は、いまいだかれていた判断や確信がそのまま肯定できるわけではないということを示唆している。男女の異性愛カップルだけがまともだという確信はいま現在進行形で問い直されている。「性的指向」や「性自認」は、しばらく前までは馴染みのない言葉だったが、これらの言葉によって、異性愛中心主義の規範が押し込めてきた不正に光が当てられるようになった。

公共哲学の探究は、私たちがいだいている判断や確信から出発しながらも、

B

な距離をとってそれらが本当に妥当かどうかを問い直してみるという反省を含んでいる。「哲学」の役割の一つは、そうした反省を自覚的に遂行し、諸々の判断や確信に整合性があるかどうかを検討し、不整合があればそれを指摘することにある。

ジョン・ロールズやユルゲン・ハーバーマスの議論^(注1) には、目下のところ支配的な見解から距離をとるための手続きが含まれている（「原初状態」や「討議」である）。

そうした反省を可能にし、促すのは、私たちの間で行われる理由の交換、理由の検討である。私たちが問題についていく意見や判断はたしかに「いろいろ」である。しかし、「いろいろ」な見方があるという確認だけで終わるなら、解決をさぐる協働の探究は始まらず、問題はそのまま放置されてしまうだろう。

III

意見や判断の根拠となっている情報や理由が確かなもの

かどうか、言いかえれば、理にかなった仕方では退けられないものであるかどうかを検討することを通じて、より妥当な意見や判断をそうではない意見や判断から区別していくプロセスが必要になる。

公共哲学は、そのような検討に際して、共有できる確かなものがあるということをおぼえていなければならない。実証的な研究によつ

て争いがないと認められたエヴィデンスや、歴史的な研究によって真実であるとされた事実認識があり、それらを私たちは根拠や理由を検討する際に参照する。もちろんエヴィデンスや歴史認識にしても修正を免れているわけではないが、修正を迫るだけのものが現れないかぎり、公共哲学は、それらにもとづいてより妥当な意見や判断を識別するための理由の検討を行う。公共哲学は、このように学問としても「閉じていない」。それは、事実を正確にとらえようとする経験的な他の諸学問と協働している。

本書のサブタイトルに挙げた「自由」³⁾と「複数性」も、「閉じていない」探究という公共哲学の特性と分かちがたく結びついている。

「自由」とは、端的には、「動く」こと、「制約を脱する」ことができる、ということの意味している。そもそも、公共的な事柄への関心は私的な関心事からいったん離れてみるという動きなしには導かれない。取り組むべき問題の時間的・空間的な^{びろ}拡がり^{びろ}を考慮するなら、「いま・ここ」^{a)}の^{a)}ヘンキョウを脱してみる動きも必要になる。そして、ある関心事について互いの情報や意見を照らし合わせ、検討するというコミュニケーションに参入するという動き、**A**、もし自分が違った立場にいたら、同じ問題をどのように違った仕方を受けとめるだろうかというヴァーチアルな視点の移動も必要である。**IV** 公共哲学の探究は、こうした数々の動きから成り立っている。

そして、自由は、その探究にあつて優先されるべき根本的な価値の一つである。自分の生を自分で生きる自由が「みんなのため」の犠牲にされるような——かつてなくてはなかつた——社会が探究されるわけではない。公共哲学が問おうとするのは、人びとの間で自由な生き方が相互に可能となるための条件はいかなるものか、そうした自由の両立はどのような制度や規範によって保障されるか、である。

「複数性」は、何か「単一のもの」には閉じられないということを指すために用いられる言葉である。**V** 生き方はさまざま

まに異なり、それぞれの仕方ですらの価値を追求する動きが生まれてくる。それらを何か「一つのもの」として表象されるものによってまとめ上げようとすれば、**I** 抑圧が避けられなくなる。単一の「民族」、単一の「宗教」、単一の「イデオロギー」

などによって複数性を廃棄しようとした暴力と抑圧の歴史的経験を、公共哲学は**フ**まえて**い**る。

違いが尊重され、複数性が肯定されるかぎり、意見の不一致は、公共的な生の **C** な条件となる。言いかえるなら、同一の事柄について意見が分かれるのは正常なことであり、何か一つの見方に凝り固まっている事態こそ異常である。問われるのは、「他のようにある」、「他のようであろうとする」自由とそれが導く根本的な複数性を維持し、それらを抑圧することのない社会のあり方をどのように構想するかである。

自由と複数性のある社会を擁護するためには、異なったものの共存を不可能にし、別様の生き方を抑え込むものを避けることのできる制度をいかに安定したものととして築けるかが鍵をにぎる。その時々妥協形成に終始しない、たんなる力のバランスに頼ることのない、そして**フク**ゲン力のある社会の安定性を探ることが公共哲学の課題である。

公共哲学は、自由と複数性のある社会を展望しようとする。とはいえ、その問いは、支配や抑圧のない社会の制度をいかに構想できるかには限られない。公共哲学の問いは、道徳的な正・不正のみならず、どのような生活環境や文化を共有することがより望ましいのか、追求すべき目的の実現をはかる際にどのように手段や資源を編成することが効果的／効率的かにも及ぶ。善・悪にかかわる倫理的な問い、効果／効率にかかわる実用的な問いも、協働で探究されるべき重要な問いである。

(齋藤純一、谷澤正嗣『公共哲学入門——自由と複数性のある社会のために——』より。出題の都合上、一部中略した箇所がある)

(注1) ジョン・ロールズ——一九二一〜二〇〇二年。アメリカ合衆国の哲学者。

(注2) ユルゲン・ハーバーマス——一九二九年〜。ドイツの社会哲学者、政治哲学者。

問1

傍線部(a)～(c)と同じ漢字を含む語を、次の中からそれぞれ選びなさい。

解答番号は、(a) 14、(b) 15、(c) 16。

(配点6点)

(a) へんきョウ

14

- ① 日本の各地をへんレキする。
- ② へんケンのない社会をめざす。
- ③ この歌集のへんチヨ者は不詳だ。
- ④ シュウヘンの事情に配慮する。
- ⑤ ガラスのハヘンが飛び散る。

(b) フまえ

15

- ① トウテツした理論を展開する。
- ② トウタツ目標を高く設定する。
- ③ ザットウで友人を見失う。
- ④ 苦しい現実からトウヒする。
- ⑤ 初対面で意気トウゴウする。

(c) フクゲン

16

- ① 悪党がシフクを肥やす。
- ② 感情のキフクが激しい。
- ③ 作曲をフクギョウにする。
- ④ 敵のホウフクを恐れる。
- ⑤ 公共のフクシに反する。

問2

空欄

A

く

C

に入る最も適当な語を、次の中からそれぞれ選びなさい。

解答番号は、

A

17

、

B

18

、

C

19

。

(配点9点)

A

17

①

リテラシー

②

タスク

③

イノベーション

④

テクニク

⑤

リソース

B

18

①

常識的

②

観念的

③

道徳的

④

批判的

⑤

中立的

C

19

①

革新的

②

恒常的

③

意識的

④

内面的

⑤

便宜的

問3

空欄

ア

・

イ

に入る最も適当な語を、次の中からそれぞれ選びなさい。ただし、同じ語を二度使ってはならない。

解答番号は、

ア

20

、

イ

21

。

(配点6点)

①

なお

②

むしろ

③

しかし

④

すると

⑤

また

⑥

いわば

⑦

必ずや

⑧

とりわけ

問4 次の文は本文の一部である。どこに入れるのが最も適当か。本文中の

解答番号は、22。

(配点4点)

いま述べた動きや生き方の自由が保障されていれば、私たちの共有する世界は多面的なものとならざるをえない。

- ① I ② II ③ III ④ IV ⑤ V

問5 傍線部(1)「私たち市民」とあるが、筆者は「公共哲学」と「私たち市民」の関係をどのように考えているか。その説明と

して最も適当なものを、次の中から選びなさい。

解答番号は、23。

(配点6点)

- ① いくつかの大学に設置されているにも関わらず、公共哲学という学問は専門性が高いため学ぶ市民が少ない。
② 市民は、公共哲学の探究の出発点である判断や確信の主体であり、探究自体を協働して行う主体でもある。
③ 市民は、公共哲学の担い手として、課題解決へと導くために統一された市民の考えを表明する立場にある。
④ 「公共」という学問を学んでいる以上、市民は現在社会の諸課題を解決することに無関係ではいられない。
⑤ 人種差別や女性差別を不正だと思っただけでこなかった市民は、その反省の上に立って課題解決に向き合うべきだ。

問6

傍線部(2)「『いろいろ』な見方があるという確認だけで終わる」とあるが、このような態度を表す語として最も適当なものを、次の中から選びなさい。

解答番号は、24。

(配点4点)

- ① 迎合主義 ② 還元主義 ③ 相対主義 ④ 日和見主義 ⑤ 平等主義

問7

傍線部(3)「『自由』と『複数性』」とあるが、これらについての説明として適当でないものを、次の中から選びなさい。

解答番号は、25。

(配点6点)

- ① 公共哲学が根本的な価値とする「自由」は、自分の「自由」と他人のそれを両立させることを目指すものである。
 ② かつて人類が経験した、「複数性」を否定するような暴力と抑圧の歴史への反省の上に、公共哲学は存立している。
 ③ 単一のものに閉じられない「複数性」という考えからは、公共的な事柄に関与しない「自由」がおのずと導かれる。
 ④ 公共哲学は、「自由」や「複数性」のために意見が異なるものが一応の一致点を見出すことを目指すものではない。
 ⑤ ある問題についていただく意見や判断が「いろいろ」と存在すること自体は、「複数性」の観点から否定されない。

問8 本文の内容に合致するものを、次の中から選びなさい。

解答番号は、26。

(配点6点)

- ① 個人や特定の集団のみならず国家までがその担い手になるという意味で、公共哲学は閉じていない学問である。
- ② 繰り返される闘いを通じて私たちの間に定着してきた判断や確信は、私たちが学ぶべき公共哲学の拠り所となる。
- ③ 歴史学のような実証的研究が明らかにした事実^にに依拠しながら、公共哲学はこの哲学独自の理論^をを重視している。
- ④ 「自由」や「複数性」を重んじつつ、異なる意見をもつものにも共有できるものがあることを筆者は否定しない。
- ⑤ 公共哲学は、政治、経済などの特に実用的な学問が担う個別の問題解決にあたり、「哲学」を示すことを目指す。

(以下余白)

AA1

